

31. 口腔内出血を来した肝細胞癌下顎骨転移の1例

(東京女子医大第二病院内科II) 平川順子・
福与光昭・中島博子・高橋春樹・
岡野 晃・富松昌彦・森 治樹

肝細胞癌の骨転移の頻度は4.8~8.8%と言われるが下顎骨への転移は極めて稀である。今回我々は口腔内出血を来した下顎骨転移の1例を経験したので報告する。

症例は55歳男性。1993年4月、肝硬変および肝細胞癌を指摘されるも放置、8月口腔内出血のため入院となった。単純X線、CTにて著明な左下顎骨破壊像が認められ、angioでは左顔面動脈、左顎動脈を栄養血管とする腫瘍がみられ、同部位は病理組織にて肝細胞癌の骨転移と診断された。また右第二肋骨においても同様の転移が認められた。肝細胞癌の下顎骨転移部からの出血はあまり例がないが今後このような危険性にも充分留意する必要があると思われた。

32. 当院における転移性肝癌治療の現況

(至誠会第二病院内科)

秋山和宏・梁 英樹・藤間 泰・
吉田一成・戸田博之・天満信夫・
鈴木 寧・相羽早百合

当院での転移性肝癌治療41例の内訳は肝切除術が8、動注ポート療法が8、Seldinger法が22、マイクロ波凝固療法が2、アルコール局注法が1例であった。肝切除はH₁のみならずH₂症例についても、積極的に肝葉切除を施行してきた。動注ポートはH₃、H₂症例を対象としているため予後不良であったが、大腸癌術後半年の肝転移例(H₁)でhypervascularityの1例に施行し、長期予後を得ることができた。外来での反復治療が可能で、造影によりチューブトラブルや治療効果が見えるという利点があった。マイクロ波凝固療法は転移巣に電極を刺入し、熱凝固(50W, 60秒)を行うものである。施行後のCTにて熱凝固壊死、縮小化が認められ、局所効果が得られた。

33. AgNORsによる肝細胞癌の組織学的悪性度の検討

(東京女子医大消化器内科、*昭和大学医学部第二病理)

川瀬千津子・斎藤明子・林 直諒・
川瀬紀夫*・太田秀一*

〔目的〕AgNORs(NORs)が肝細胞癌の病理組織学的悪性度と相関するか否かを検討した。

〔方法〕対象は肝細胞癌60症例の非腫瘍部40カ所、

腫瘍部59カ所、銀染色施行後核100個を観察し1個あたりの平均NORs数を算出した。更に存在様式で4型(type A, B, C, D)に分類し検討した。

〔結果〕平均NORs数は非腫瘍部より腫瘍部で有意に増加し腫瘍が低分化程増加した。Type別ではtype Bは腫瘍部で多く、低分化程増加、逆にtype Aは非腫瘍部で多く腫瘍が低分化程減少した。同一症例で平均NORs数のみでは非腫瘍部と腫瘍部の差が明らかでない例でも、type別では差がみられた。

〔結論〕NORsは肝細胞癌の病理組織学的悪性度と相関し、特に高分化型の診断において型別の検討が有用であると考えられた。

34. スクリーニングにて発見された肝内胆管癌の1例

(志村胃腸科外科病院、*東京女子医大第二外科)

河野史尊・太田代安律・太田代紀子・
遠山政彦・志村 巖・亀岡信悟*

肝内胆管内に乳頭状に発育する乳頭型肝内胆管癌を経験したので報告する。症例は69歳、女性。スクリーニングで施行した腹部超音波検査で肝に腫瘍陰影を指摘され入院となった。腹部超音波およびX線CT検査にて肝S2に2cm大の腫瘍像および末梢胆管の拡張像を認めた。また、ERCにて左肝管の途絶像を認めた。以上より左肝管を閉塞する形の肝内胆管癌と診断し、肝左葉切除術を施行した。標本は左肝管に乳頭状に発育し閉塞した母指頭大の腫瘍で、高分化型腺癌であった。乳頭型肝内胆管癌は転移や浸潤が少なく予後も良好とされ、積極的な外科療法が有効であるが、早期発見のための超音波検査によるスクリーニングは有用と思われた。

35. 腹腔鏡下胆嚢摘出術におけるDIC-CTの経験

(都立豊島病院外科)

長谷川正治・

済陽高穂・山口峰生・上原健一・
小川一平・佐藤正典・片田雅孝・
内田恵博・竹入正彦・三浦豊章

当院では1992年8月に腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行して以来、1993年12月までに63例に実施し、重篤な合併症は皆無で、全例安全に遂行し得た。当院では腹腔鏡下胆嚢摘出術に際し、術前検査としてDIC-CTをルーチン化し、肝内外を含めた胆道全体像の把握、総胆管結石や肝・胆・膵腫瘍性病変の除外診断を行い、手術方針決定に寄与させている。腹腔鏡下胆嚢摘出術を遂行する際の最も重要なポイントは胆嚢管の処理である。DIC-CTはDICと比べて、胆嚢管の描出能に優れ、